



I はじめに

分科会の基調では、現実社会の中で生きづらさを抱えさせられている人たちが社会の隅に追いやられ、そんな人は居ないかのように見えづらくなっている。さらに、日本社会はその責任があたかも個人にあるかのように語られている実態がある。また、ネット上の差別投稿等社会的マイノリティの人たちの尊厳を脅かしている。排外主義の横行、根強い差別意識等がある。

このことから、これまでのまちづくりの成果である「部落解放子ども会活動」「識字運動」「地域の文化活動」等を踏まえ、すべての人の人権が保障され、誰もが安心・安全に暮らせるまちづくりを目指していくためにはどうしていくのかを報告をもとにして事実と実践を出し合い、討論・意見交流することが提案された。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—①

「解放研の『これまで』と『これから』

(高知県人教)

1人の先輩が解放研を立ち上げ 48 年めとなった。「部落解放運動を自らの課題として捉え、実践及び研究協議することにより、労働者自身が自分の差別性に気づき、世の中の不合理や差別と闘う運動を創り出すこと」を目的に始まった。

解放研の取組から、学び合い語り合いから、過去の自分の差別性や「普通とは」などの議論から大切なことは、相手がどう感じるかを察することではないかということに気づかされた。そして、気づいたら行動し継続することを大切にしてきた。そのことが意識をも変えるのではないか。これが部落差別をなくす一歩になると考えている。

—主な質疑と意見—

大阪・福岡 部落研はどんな立場のメンバーがいるのか、どうつながっていったのか

大分 その違う立場のメンバーの語り合いがどんな影響としてあるのか。

報告者 労働組合のメンバーが解放研へだが、会計年度の採用の方と教員の構成メンバーはいない。自分の経験以上に他の人の経験を聴くことがとても学びになっている。啓発については意識して行

いたい。お互いの意見交換は大事だ。とても先輩の語る姿が印象に残っている。それ継承したい。

協力者 今後連携していくためにつながっていかうとしていることはあるか。

報告者 教育委員会と人権啓発の取り組みを一緒させてもらいつながっていきたい。

千葉 被差別当事者の方との関係と被差別地域の状況を教えてほしい。

報告者 「機関紙」で組合員全員と情報共有、当事者の思いを聴く研修会、職員の当事者からおもいを聞いている。

高知 宿泊研を行っていた。語り合いがとても楽しかった。

大阪 職員異動のサイクルはどのような影響があると考えるか。

報告者 学習会が繰り返し行われているので、多くの職員のまなびになっていると考えている。学習を重ねている人も多くいることがよいと思う。

協力者 解放研の存在がまちづくりにどのような意味をもっているのか。

報告者 学習した人が組合でも、職員でも新たに解放研に入っていたりしていることもあり、人権について考えていく街づくりが確実に広がりをもっている。

福岡 職場の中に解放研があることはとても良いことだと考える。労働組合と被差別部落は共に闘う仲間だと思っている。それを解放研があることで語れる場がある。思いを伝える場があると思っている。報告に感謝する。

熊本 全体会でポジティブな出会いということがありましたが、であいがもたらすつながりやこちよさがある。しかし、解放研を抜けてしまう人もいる。新しい出会いの中での魅力はとても大きなことではないか。

高知 私が職員だった時に解放研というものを知らなかった。黒潮町の話聞いたとき魅力を感じた。入ってさらに力を共有できたし、楽しかった。活動が輝いてみえた。

高知 解放研をずっと続けているが、どう継続していくのが課題だ。地域の広がりを意識しながら活動しているが単発的な活動ではなく、どんどんつながっていきたいし、一緒に成長したい。

協力者 私の地元も解放研があるが、子ども会や思いを語る会にも参加してくれている。学んだ人たちがさまざまな活動の中核を担っている。そこが人権のまちづくりにつながっているのではと思っている。黒潮町では感染症でなかなか進まないなか、一から創り上げ、「自分を語る」を土台に解放研の活動を続けていることに感銘を受けた。人と人がもつつながりあえるように、解放研の取り組みを続けてほしい。

—報告2—②

「地区進出学習会へのこだわり」

～共に学び、共に行動する～ (鳥取県人教)

中山ふれあいセンターは「人ある限り人権を」をモットーに活動している。1978年「社会的立場を深める指導」から学習会が始まっているが、地区進出学習会がなくなってしまっている地区もあるなか、学校が、学習会の必要性を理解して存続している。

「ここに差別があるんだ」ということを前提に学習会がある。子どもたちが中心となっているが子どもたちとともに学ぶおもいがあることが学習会が続いている理由だと思っている。子どもたちも学習会が当たり前なものになっている。

「学習会をなくす風潮にあるのかなぜ続けているのか」との質問があるが、学習会をすることが当たり前なのでそもそもそういう発想がない。「差別に負けない強い心をもった人間に成長して欲しい」という保護者の熱意がある。これが続いている大きな理由ではないか。全家庭が夏休みの見守り学習に参加していることでもわかる。差別があることに否定的な家庭も学習会には9年間参加し続けた。これが50年何事もなく続いている。「仲間を大切にす」学習や部落問題学習、「差別と出会ったときの行動」など「堂々と胸を張ってはつきりとものが言え、行動できる人間になろう」を目標に学習会が開催されている。学習会は「楽しい」学校ともつながっている。

学校は、出自については、積極的に明かさないが隠しもしないスタンスで保護者の了解もある。立場がわかっているその学習会であると確信している。差別がある限り学習会を続けていく。差別にあっても負けないなかがいること、負けそうになったら帰ってきて、支えてくれるなかがいることを学習会でつたえていく。

—主な質疑と意見—

(不明) 私も教育集会所で「差別に負けない、差別と闘う」学習会をしている。小学校では「地区進出学習会」について「知る学習指導」とは何か教えてほしい。

高知 「部落差別に負けない」とあるがどのように解釈すればよいか。「いじめや差別を見たときにダメだとはつきり言える力」自分ははつきり言えなかった。でも支えがあった。子どもたちへのアドバイスはあるのか。

鳥取 地区学習会で頑張っているなかがいることを5月の人権学習で紹介することを中心に指導をしている。学習会に参加している子どもの保護者にも学習後の感想の紹介もしている。

報告者 自分が学んだ人権学習は覚えていない。就職差別が何なのかかわからず何もできなかった。(差別をなくす)具体的な行動の姿として言葉が大切だと考えている。こうしないといけないのではなく、めざすものである。相談にきた子どもに対しては、最低限学習会に参加しているなかが助けられる。そのために学習会をしているなかがいる。なかがいる、いないが「はつきり言える、言え

ない」にかかわってくる。これが学習会の意味である。

三重 100%の地区進出学習会への参加とあるが、私の所では小学生低学年の参加率が低くなってきている。100%参加できるしくみがあったら教えてほしい。また、地区外の中で学習をしてくことが中学を過ぎるころからあると思うが、その内容を教えてほしい。

報告者 開講以来、やめた子どもたちがないのでわからないが、新一年生の児童の家庭に参加の呼び掛けをしている。「差別がないから学習会しなくてよい」「もうやめてもいいのでは」という声が上がらない。なぜなら「差別があるから」と共通のおもいがあるからである。そんな声が上がっても続けていけるよう頑張っていく。学校で学んできたことと地域の偏見の狭間で起こる差別事象もある。

鳥取 まず、話をしていくのはおじいさんおばあさんである。また、おとうさんおかあさんである。すべての人の許可が必要。学習会へ参加していた保護者がいることが大きいのではないかと思う。だから第一に保護者の理解を求めて活動している。学校が中心に決めるのではなく、保護者全員が保護者会などに参加できる日を保護者中心で調整している。

協力者 被差別当事者が差別をなくしていく取り組みをするのは、差別に負けない力を身につけるためである。それは、社会の中に差別があり生き抜くためのすべであると考えている。人権のまちづくりをしていくには、被差別当事者でない人たちが学習をして偏見や差別をなくしていくことが大切であるが、その原点として被差別当事者の人たちが立ち上がって学習していることを知ってほしいと思う。

三重 「いじめや差別はダメと言え」学習会が大切だと思うが、高校で一人になったとき、誰が助けられるのだろう。地区の子どもだけでなく本当は地区外の子どもの学力として必要なのではないか。地域だけが頑張るものではないと考える。今の差別をどうしてなくしていくのかが必要なのではないか。

—報告3—②

『私たち』の部落研 (千葉県同教)

部落研に参加する私の変容について報告する。部落研は暖かい場所、人権課題につて語り合う部落研、他人事とみていた私、差別に怒りのない私語りを聴くこと語ることで「共事者」にある自分。「障がいがある弟を差別していた」と語るムラの青年のことが「私」と重なった。うつ病の弟のつらさに目を向けず自分のつらさだけを考えていた自分に気づかされた。「自死を選んだ友の死」について自分もつ怖さから逃げていた自分ではいけないと思った。「語ることはしんどいが、大切なことだから語る」ということを学んだ。そこから「共事者」になることを決意する。

「差別する自分」「差別される自分」を語り合うこ

とが自分事として差別を捉えていることに気づいた。語り合うつながりが差別をなくしていくことにつながる。私たちが当事者である部落研として活動していきたい。

大阪 部落研に参加することで、自分が変わってきた。そのことを語ることで目の前の子どもたちはどのように変わってきたのか。

大阪 反差別の取り組みまでにつなげていくにはどうしたらよいと考えるか。私は、「まち」の取り組みの素敵さをつなげると良いのではと考えている。

三重 報告者自身のクラスの生徒の課題をどう捉えて、どう解決しているか教えて欲しい。加差別の立場にいることの自覚についてはどうか。

報告者 私が生徒に語るの、大切な人だから語る・語れるのではないかと気づいた。そのことがあって生徒は大切なことをしんどいことを話しかけてくれるのではないだろうか。解決策はないが生徒自身が考えていけるのではないかと信頼している。だから一緒に考えたい。

「弟」の優しさや強さに気づいた自分がある。偏見がなくなれば、魅力が見えてきた。そんなことをさまざまなその人が抱えさせられている差別の問題を重ねていきたい。

高知 自分は高校時代教師から差別を受けた。報告者のような方が増えれば差別を受ける人が少なくなり、差別はなくなると思う。

香川 聞こえる声に対しては、つながりあえたのだが、声を上げていな子どもたちに対して何もできてなかった自分を反省している。そこが更に大事なのではないかと考えている。

兵庫 同和教育で育った子どもたちが、高校生になったら差別をなくしていこうとするなかまがすくなくなってしまう現状がある。これではいけない、言わなければ何もわかってもらえないと勇気をもって「立場宣言」を子どもが行った。クラスの雰囲気真剣なものになった。差別に闘う力が培われていたことに気づいた。差別をなくすには「差別について知ること」「自分のことを語ること」「自分を語ってもいいというつながりがあること」を子育ての中で気づかされた。

高知 ひどい差別を受けていたけれども、子どもが同和教育を受けていく中で、差別をなくすためにつながっていく姿がとても素敵で、取り組む人たちの熱意が大きいと思う。

三重 未だに「地域は怖い」という偏見がある。刷り込まれている。差別の現実を観て同和教育を行って欲しい。

報告者 皆さんが多くを語ってくれてとてもうれしい、ありがとうございました。

— 3本の報告のまとめ —

高知の報告では、活動が楽しい、自分の思いを語るところがとても良い。鳥取では、「地区進出学習会」人と人の関係性を大切にしている。50年も

続いている。差別がなくなっていないということであるが、差別に負けない取り組みであり、人権を取り戻して取り組みであることを忘れてはいけない。千葉の報告では、「自分の差別性」に気づいていく過程から自分を振り返り、生徒をはじめとしてさまざまな人と語り合っていく取り組みであった。「差別を知ること」「差別は自分の中にあること」を気付かせてもらった。

— 報告4—①

「きみら、何のために太鼓叩いてるん？」

～浅香太鼓集団「獅子」の想い～

(大阪市人教)

浅香町に住んでいて、解放同盟の役員をしている。浅香町は小さい町、大阪公立大学が移設されてきた。市営地下鉄の車庫が住民の反対を押し切って設置された。地区の置かれた状況は、いろいろなところに車庫の設置の打診を大阪市はしたのだが反対に合い、浅香町に話をもってきて反対を押し切り設置された。そのおかげで人の出入りが制限され、そこに出入りする人たちは被差別部落関係の人たちであろうとみられていた。陸の孤島である。住民の住める場所も制限があり、災害を受けやすくなっていた。(1960年代)その後、住みやすい街にしようと住民が立ち上がった。1987年に最終列車が出て行って、車庫をなくすことができた。そして、解放子ども会に参加するようになり、太鼓を叩いていた先輩にあこがれ、太鼓を始めた。その差別をなくす学習の中で、沖縄に行き和太鼓の師匠である人たちと出会った。和太鼓を教えてもらうと同時に沖縄で起こった戦争での出来事を学ぶに至ったのである。

その後、大きな転機が訪れた。太鼓演奏の大きな集会で出会った人から「きみら、何のために太鼓叩いてるん？」と訊ねられ、楽しいだけでやっていたが部落解放運動の一環としてやっていく必要性に気づかされた。部落産業の太鼓という観点から自分たちが伝えられるものがある。改めて「浅香対抗集団『獅子』」と名乗った。地名を背負う意味を考えた。当然差別について学習した。今でも差別はある。その現実がある。そのなかで「差別って何」「伝えていけることって」と考えるようになり活動している。

活動をつなぐために子どもたちとともに頑張っている。また、様々な背景をもつ子どもたちもいるが「太鼓を叩く」ということがモチベーションになっている。他県の人たちとのつながりも考えている。大阪でも太鼓と沖縄戦の学習を通して人権や平和について考え、教育の大切さを伝えていっている。

— 主な質疑と意見 —

香川 聴いていくと、地域の人たちとの関わり、教職員とのつながりがあるようだが、それを創っていくヒントがあれば教えて欲しい。

報告者 教育の担当もしているが地域の小・中学校

と連携するための会議がある、学校の現状を聞いたり、太鼓を叩く子どもたちの様子を聞いたりしている。特にケース会議に参加して「太鼓」で何かできないかも協議している。子どもと関わっているのも、教職員とのつながりもできやすい。教職員の力も借りながらではあるが。

(不明) 部活動としての部活動の中で部落問題学習はどうなっているか。地区出身でない子たちもいると思うが。

報告者 浅香太鼓「獅子」13人いるが私自身が部落問題をどう伝えるのかわからないこともあり、部落問題学習はできていない。しかし、やっていけないといけなのだが、今回地域の中で子どもたちの中でトラブルがあり、そのことをきっかけに私たちの活動の意味を伝えることができた。メンバーは地域外の子たちばかりになっている。どう伝えたら良いかは悩んでいる。沖縄に行ってきたが少しずつ学習している。

大阪 私たちは様々な地域に残る行事ごとにその歴史や意義について話させていただいている。

報告者 子どもの変容があったこともあり、浅香太鼓「獅子」の活動自体が意味のあることであると考えている。少しずつではあるが進んでいきたい。

京都 地域のお祭りの復活の際に子どもたちに話をさせていただいた。出会いは、子どもの経験となっている。どんな出会いを創っていくかが学習ではないか。集団づくりはななかまづくりだと考えている。

報告者 浅香町も活動の場が少なくなってきた。前は、学ぶ場も多くあった。しかし、その中で家を浅香町に建てる人たちも増えてきた。「この地域のことを知っていますか？子どもたちに部落問題学習を教えて良いか」と訊ね進めている。「ぜひ教えてください」という声が多く。今進めているところである。

千葉 地域の人たちの差別への心配を考えると差別をなくすための運動を広げるために行っていることがあれば教えて欲しい。

報告者 地区出身の親が太鼓をやっていたことがきっかけで太鼓をやっている子がいるが、そのことをどう伝えるかも今考えている。しかし、差別を乗り越えるようなカッコよさを求めて活動をしていきたい。

千葉 被差別部落のことを伝えるしんどさについて「被差別当事者は部落問題を伝えられる」と誤解があったのではないかと感じている。

熊本 地区内の子も、地区外の子も正しく学ぶ事が大切で、この報告の取り組みはそれをつなぐ取り組みとを感じる事ができた。差別のないまちをめざしましょう。

熊本 地区内の子は「テストの答えを教えてもらっている」という偏見があり、地区外の子にも地区の中で学習会の内容を理解してもらうことも必要ではないかということで地区内・地区外の子とも一緒に学習していくことを進めている。

高知 「差別に出会ったら闘わなくてはいけない」ではなく、話を聞いてくれる人やわかってくれる人そんな出会いがとても大切で、自分のことが言える関係を築いていくつながっていくことが素敵ではないかと思う。全人教でもこんな出会いがあることをうれしく思っている。

—報告5—⑱

「私たち自分のために学んでいるんです」

(愛媛人教)

部落問題学習の是非について、疑問を投げかけられたことからこの取り組みが始まった。「部落差別は自分の周りにはない、だから部落問題について考えることができない」「何も知らない子どもにわざわざ教える必要はない」と言う母親に理解してもらうまでには至らなかった。人権・同和教育参加には、懇談への参加率が極端に低い。このことから、教師も保護者も「子どもを育てる同じ大人」としてつながることを意識した。PTAの人権・同和教育委員会で投げかけたところ「親が差別しているかもしれない」と子どもが思うような生き方はしたくない「胸が張れる大人になるための学習会」に参加を呼び掛けた。学習会では「きれいなことを言っているが、自分自身の体裁を考えていたのではないか」など自分の弱さを語りあえるようになってきた。「歴史学習会にも参加しよう、正しい知識を大人も知ろう」しかし、参加者は少ない。でも参加者は学び続けたい。参加しやすいようにしていこう。学習会では、歴史学習を日常生活に重ねる話し合いになった。「差別をしない生き方」を考えるようになった。そのためには「正しく知ること」が大切、なにより「自分のために学んでいる」という意識が高まってきた。「山の粥」の学習では、参加者から人権・同和教育の大切さを感じたという意見が多くあった。

一方で、「どこが部落か」を教えてしまうことになるのではと心配の声も聞こえた。そこを乗り越えるのが人権・同和教育なのだけれど……。やはり、学び続けることを確認した。そして、人権・同和教育は一人でするのではなく、保護者も子どもも教員も私自身もみんなで学習していくものであることを気づくことができた。そして、多くの出会いで意見を聴くことが重要。さらに「差別を無くすために自分のために学ぶ」と決意した。

—主な質問や意見—

熊本 どんなに人権・同和教育を前向きに進めていこうとするが、保護者から後ろ向きなことがある。そんなとき、「子どもの姿で保護者を変えていけばよい」と思っていたが、PTAの人権・同和教育部はどのような経緯できたのか、またもう少し詳しい活動内容を教えて欲しい。

(不明) この学習会を立ち上げようと思ったのか。堺市 人権・同和教育参観日の経緯やPTA活動の縮小する傾向にあるなかPTA活動している人の

熱量はどこからくるのか、学習会への準備等教えて欲しい。

愛媛 「ともに学ぶ学習会」とした理由について知りたい。

報告者 私は中学校で被差別の子どもたちに関わってきた。親はわかっていない前提で同和教育をしていた自分がいた。しかし親っていうものは無条件で子どもが心を預けて親の背中をみて成長していく一番近い大人であって、その次が教師で、子どもに近い大人同士と一緒に学ぶ事は大切だ。なぜまだ同和教育するんですかという疑問を一緒になって探していきたいと思った。それが最初だ。なかまがすぐそばにいたのも大きいし、組織がすでに出来上がっていた。私の同和教育は親と向き合うことだった。親に対して上から視線だった自分を振り返ったことも大きい。

大分 PTA が学ぶ事で人権・同和教育が変わってきたのか、学校や教職員がどのように変わってきたのか。部落問題と向き合うところから始めている自分がある。まちづくりの展望を考えるとときに成果を教えて欲しい。

報告者 部落問題とどのように出会っているのかということに関して、しんどいことを聞かせてもらわないとわからないのかなということに関して疑問がある。被差別体験を聞いて初めて目が覚めました、ということやしんどいことを話させないと目が覚めんのかということを感じるようになって、そうであれば、同じ気持ちで語っていくことも必要と思う。私の学びを私の場所で広げていきたい。違う場所に行ってもなかまを増やしていき、差別が少しでもなくなるようになればいいと思う。そして、学んだ一人がその場所で広げていければ差別はなくなっていくかもしれない。そんなことを思って活動している。

愛媛(報告者同一学校教職員) 昨年6年生受けもっていたが、2年生を受け持って6年生だけの学習ではいけないなと思った。そこが変わったところだと感じている。

愛媛(報告者同一学校教職員) 私も学習会に参加している。自分自身の親へのコンプレックスからくる自分の弱さに気づくことができた。それを語っていくことが子どもたちの前に立つ自分を変えたと感じている。強制してしまう自分もいるが、そんな自分に気づけ、子どもたちの前に立っている自分が変わってきたと感じている。

学校での授業を保護者に伝えて、感想聴いて欲しいという自分がいたが、学習会を一緒に創り上げることで、保護者の考えの深さに気づくことができた。そのことで子どもを真ん中にして保護者と話ができ、子どもに対する自分の思いも伝えることができた。

香川 小豆島では、子どもを見守るため保護者会を定期的にやっている。保護者同士や教職員と保護者とつながることを考えていた。子どもが高校に進学したときに、保護者が孤立してしまうので

は、悩みを打ち明ける場所がなくなるのでは、ということに対してどうするかという保護者会を始めたが、コロナ過で進めることができず悔しい。しかし、再開する勇気をもらった。

—総括討論—

協力者 人権のまちづくりの根本は何なのかを5本の報告をもとに論議できたらと考えている。

大阪 差別をなくすためには、部落問題学習をしていく中で人とつながりあう学習を中心にして進めている。子ども同士だけではなく出会う人すべてがつながり続けることを考えている。差別に負けないというキーワードもあったかと思うが、正しく知ること、多角的に見ていくことも重要だと思っている。そういう先人たちに学びたい。

高知 差別に負けない人、立ち向かうということについて考えた。それぞれの考えはあると思うが、それぞれの状況で差別に立ち向かっているそのことを考えると、「闘う」や「負けない」という言葉で括らないで欲しい。逃げながらも闘っている人もいる。わかってほしい。そのことから仕事なかで人権問題に関わっている皆さんに差別は日常にあるということを知って欲しい。日常を中心に考えていくことが差別をなくすことになるのではないかな。
福岡 ここで解放学習をしていることを周りの人に言いたいという子がいた。学習会に入ることを配慮した私に「私は何も悪いことしていない誇りがある」と。この言葉に、(かつてに隠していたいことなのでは)という思い込みや、「差別に負けないように頑張らんといかん」と言っていた自分がいたことに、子どもに気づかされた。どこに課題があるのかを観たうえで差別をなくす活動をしていく必要がある。

(不明) 人権教育については差別をなくしていく力をつけて欲しい。自分自身結婚差別を受けて、そんな子どもたちになって欲しくないと思う。それをなくしていく同和教育であってほしい。

愛媛 自分がその立場になって初めて(自分のしんどさの語り)、一緒に歩いてくれる人とくれない人がわかって、自分の在り方を考えた。語るしんどさでつながりあえることこそが信頼しあえる。そんな人がいて初めて自分らしさを見つめることができた。しかし、差別に出会う怖さ、被差別の皆さんと重なった思いはある。そんなときは自分を語りたい。自分の思いを受け取ってくれる人であれば語りたと思うし一緒に活動したい。「大変だね」だけでは憤りを感じる。差別をなくす一人としてしんどさの意味を伝えていきたい。

千葉 報告できたことを感謝したい。この出会いが、つながりが大切であることをあらためて感じている。つながるまちこそが差別をなくすことになっているのではと思う。立場がない関係性が築けていくのかということが学びになりました。私こそが、皆さんこそがつながりを創る主体者となって欲しいと切に思う。

三重 部落問題学習はぜひ積極的にやって欲しいが、差別の現実は今も厳しいものがある。これをどうしていくかは人権のまちづくりについて大切な視点ではないのか。学校では学習をしているが地区でも学習をしている。

しかし、学習をしていない人がまだいる現実をどうするのか、今ある差別の現実があるのではないのか。そういうことを知らせることが啓発ではないか。部落差別はしてはいけない法律もある。ということは、部落差別は犯罪であるということをしかり伝えて欲しい。今はそれが大切なのではないのかと思う。

千葉 ようやく80になって話せるようになったと言われた。語るきつさや語れない思いを受け取ったことを知った。そのことを大事にしたい。

福岡 学級に入れない子も和太鼓ならやってみようという気持ちになる。和太鼓をする意味を語って演奏を始めるからだと思う。地域もつながっている。差別をなくすために自分を語っていく活動も行っている。それが子どもたちにとっても差別をなくすための営みとなっている。今日の報告をもとに続けていきたい。

高知 今回の報告を聴いて「なんで通わんといかんの」「あそこには通わんでいい」という現実に向き合っていきたいと思う。ありがとうございました。

福岡 まちづくり・ひとづくりは同じだと思った。今回の差別の壁を双方から乗り越えていくことに感銘を受けた。地元にかえって伝えていきたい。

—報告者の感想—

高知 黒潮町の皆さんありがとうございました。今回「当事者性」など自分の考え直しとなりました。

はじめは完成されたものでないといけなかった。出会いはいろんなことを気付かせてくれるものだと思った。語ることの重要性をあらためて感じた。

自分たちの活動で、自分を語る事がコロナ過のせいにしていたり、形骸化に気づいていなかったりしていたのではと思う。昔に戻り頑張りたい。

千葉 うれしかったこと「一人で発表した気になったけれど、一緒にいた人たちの顔が浮かんだ」私も今日は同じ気持ちになった。感謝の気持ちでいっぱい。

鳥取 差別に負けない強い子どもとは勝ち負けではない。何かあったら、「それっておかしい」という勇気をもつこと。一歩前に出て一言いうこと。それが差別に負けないということと捉えている。地区進出学習会でもそのように進めている。この報告に対しての意見を踏まえてこれまでを振り返り、よりよく次に進みたいと思う。

大阪 私たちの活動は人権啓発活動と捉えている。メッセージは差別があることを知っておかないと「学習をしないと君が差別する側にまわってしまうのだよ」「君が差別をしない人になって欲しい」ためにこういう活動をしていることを常に伝えてい

る。そんな子どもたちが増えることで差別が減っていく世の中になっていくと思うし、そんな子どもたちが仲間を増やすことで、差別のない社会ができあがっていくと思っている。共感をもってくれる人たちがいるとうれしい。どこでも行く。

愛媛 同和教育、みなさんと出会えていいなと思った同和教育が教え子との再会を果たしてくれた。人と人が出会うのが同和教育だ。同和教育のいいなというところを伝えていきたい。でも差別は許さない。必ず差別をなくしていく。

この報告を友人や家族に伝えていきたいと思う。ありがとうございました。

—総括—

この2日間で考えたこと感じたこと討論したことを皆さんの持ち場や学習会の場面で報告していただくことがつながりを広げる、また全国人権・同和教育研究大会が学びになったことを感じてもらえたことをうれしく思う。

—編集後記—

今回の分散会はとても考えさせられる報告や指摘があった。

議論の一つに「差別等について自分を語ること」にどんな意味があるのかについて確認と議論があった。人権課題の一つは、差別はないし、していないと考えている人や差別があることを知らない人に、差別があることを気づかせたいことである。その取り組みの一つが「語る」「語り合う」である。その「語る」「語り合う」が人と人をつなぐことにつながって、人権が尊重されるまちづくりへとなくなっていくことが報告と討議の中で確認出来た。

地区進出学習会での当事者の学習の必要性が確認されるなか、地区外の部落問題学習こそが必要ではないかと論議になった。それぞれに差別をなくすと取り組みなのであるが、持つ意味合いが違うことにも気づかされた。そんな論議の中で、今も偏見が刷り込まれ、差別があることを訴えられる場面があり、今まさに人権が奪われている現実があることを忘れてはいけない事を肝に命じた。